札学保

札幌市学校保健会

No. 164

2025. 3. 13

事務局　〒004-0864 札幌市清田区北野４条５丁目4-80
札幌市立北野台小学校
TEL (011) 882-5281　FAX (011) 882-2792
学校保健会HP http://www7b.biglobe.ne.jp/~satsugakuho/

# 多様性を受け入れる学校を目指して

札幌市学校保健会　副会長　**下　山　敏　晴**

この４年間、中学校校長会の保健体育部に所属し、「健やかな心の育成」の一環として、「小学校の実態」「家庭との連携」「別室登校」「関係機関との連携」等、不登校に関する研究に携わってきた。これはあくまでも、自分自身の経験に基づく私見ではあるが、多くの方々に不登校の実態を知ってもらうために述べたいと思う。

加速度的に不登校の生徒が増えた今、学校には様々な対応が求められている。有償ボランティアである相談支援パートナーによる別室登校の学習支援、おもに担任あるいは学年教師による放課後登校の対応、担任の家庭訪問、外部の公的な教育相談機関との連携、あるいは民間のフリースクールやデイサービスとの連携等、多岐に渡っている。教師や保護者、関係者による地道な努力の積み重ねは、少しずつ前に進んでいる生徒の成長に貢献している。

また、「緊張しながらも校長と会うことで、一歩踏み出すきっかけになれば」「会って直接励ましの言葉をかけたい」「親子の悩みが少しでも和らげば」という理由から、これまで延べ数百人の不登校の生徒とその保護者の方々との面談を行ってきた。(もちろん、面談を行うことが難しい生徒に無理強いはしないが)そこから感じたことは、ほとんどの親は初期段階では、何とか子どもを登校させようと闘っている。なかなかうまくいかない中、親が「教室に入ることがゴールではない」「どうにかなるだろう」と気持ちが吹っ切れたときに、子ども自身の表情も少し和らぎ、親は子に寄り添い、子は親を頼りにする、親子の温かい関係が生まれる。不登校の子をもつ親を孤立させないためにも、我々は、子どもだけでなく、保護者にも積極的に関わる必要性を感じる。

不登校の絶対的な解決策を見つけることが難しい中、体制・組織としての有効手段として、１つのヒントになるものを見つけた。数年前話題になった、愛知県岡崎市のすべての中学校に設置されている校内フリースクール「F 組」を紹介したい。

……「F」は「Free（自由)」「Fit（みんなに合う)」「Fun（楽しい)」「Future（未来に向かって)」を意味する。学校間で差はあるが、１校につき５～15 人くらいの生徒がＦ組に通っており、学校生活に困り感がある生徒、長期欠席傾向のある生徒の「個別最適な学びの場」として運営されている。最近では、不登校の生徒に別室登校を勧めている学校が多いが、Ｆ組は、通常の学級と並ぶ１つの学級であり、当然Ｆ組の担任もいて、学校の中にあるフリースクールという存在である。クラスの授業をリモートで受けることもあれば、１時間だけ通常の学級で授業を受けて戻ってくることも可能であり、各々が自分のできるペースでスケジュールをたてている。Ｆ組の理念の１つには、「教室復帰ではなく社会的自立を目指す」という言葉もある。……

ここには、不登校をどうにかする、不登校をなくす発想ではなく、むしろ不登校という言葉を使うのもはばかられる、学びの場の多様性を受け入れる新しい学校のスタイルのモデルケースだと思う。不登校対策が教育の喫緊の課題である今、ぜひ「F 組」のこのような取組が、全国に広がっていくことを望んでいる。

# 第40回　札幌市学校保健会　研究大会

## 令和６年12月７日（土）　於　ホテルライフォート札幌

令和６年12月７日（土）、ホテルライフォート札幌にて、札幌市学校保健会研究大会が開催された。学校保健関係者を中心に約50名の参加があった。本会は、研究主題を「児童生徒自らが健康を創りだす実践力の育成」として、２つの視点を設定している。

**視点１**　子どもが自分ごととして考える教材化の工夫
**視点２**　子どもの思考を支える専門家のかかわり

この研究の視点をもとに、４つの部会に分かれて話し合いを進めてきている。

**４つの部会**　1．健康教育　2．保健管理　3．心の健康　4．地域保健

今年度の研究大会では、「札幌の学校保健を考える」～学校医（三師会）・養護教諭・栄養教諭（栄養士）と協働して～と題し、パネルディスカッションが行われた。

## 児童生徒自らが健康を創りだす実践力の育成

| | | |
|---|---|---|
| コーディネーター | 札幌市学校保健会　事務局次長<br>札幌市立幌南小学校　校長 | 大宮　健一　氏 |
| パネラー | 札幌歯科医師会 | 佐藤　友昭　氏 |
| | 札幌市養護教員会 | 伊勢真由美　氏 |
| | 札幌市学校給食栄養士会 | 千葉　直美　氏 |

### 【パネルディスカッション】

●コーディネーター　大宮氏

早速ですが、札幌市の子どもたちの健康づくりに関してそれぞれのお立場から話していただこうと思います。

○パネラー　千葉氏

平成26年から札幌市の小学５年生と中学２年生を対象に、児童・生徒の健康と食生活に関する調査を実施している。目的は、札幌市の児童・生徒が心身ともに健康に学校生活が送ることができるように、望ましい食習慣を身に付けることである。栄養士会では、朝食摂取率100％を目指して活動を進めている。

○パネラー　伊勢氏

保健室で子どもたちと関わる中で、心に不安を抱えているのではないかと感じられる子が増えている。コロナ禍による影響として、人と人との関わりの希薄化が見られる事象もある。また、保護者からは、他の家庭での様子についての問い合わせがある。どうすれば子どもたちが健康につながる行動を促し、自分ごととして健康を考えることができるのかに苦慮している。保護者の協力も必要だと考える。専門家の力も借りたいが、お忙しい中と思うので、声をかけて良いのか迷っている。

○パネラー　佐藤氏

全国の子どもたちの虫歯数の平均は減っているが、虫歯の多い子と少ない子の二極化が見られる。札幌はより顕著である。その解決のため、光陽小学校で歯磨きの重要性を伝える授業を行った。虫歯の画像などを見せることで、恐怖を与えるのではなく、関心をもってもらうことをねらっている。

子どもたちからも歯ブラシをしっかりしたいという感想があった。

○フロア　髙橋氏（光陽小学校　校長）

毎年検診等で自分たちの歯を見てくれている歯医者さんから、歯のメカニズムについて教えてもらった。子どもたちの表情を見ると、専門家の「本物の力」にはかなわないと感じた。

●コーディネーター　大宮氏

子どもたちのため、「私たちにできること」へと話を進めていきたい。

○パネラー　佐藤氏

歯科検診の目的の一つはスクリーニングであり、どうやったら口の中を健康に保てるのかを子どもたち自身に感じてもらいたい。そのために養護教諭の先生との連携が大切であると感じている。

○パネラー　千葉氏

アンケート結果の活用を更に進めていきたい。栄養士が活用することはできているが、様々な人と連携することでさらに効果を発揮できるのではないか。例えば、懇談会の資料や新１年生の保護者説明会などに活用することも考えられる。

○パネラー　伊勢氏

学校薬剤師の先生に薬物乱用防止教室をしていただいている。始めたのは、学校保健会などで、薬剤師の先生からいつでも声をかけてくださいと言ってもらっていたことがきっかけである。実際に来校が難しくても資料などをいただくことも考えられるのではないか。それは可能なのだろうか。様々な方法での連携を考えていきたい。

○パネラー　佐藤氏

私の使った資料を使っていただくことも、もちろん可能です。いつでも声をかけていただければ。

○フロア　中山氏（学校薬剤師）

「薬の正しい使い方」「薬物乱用防止教育」について声をかけていただくことが多い。飲用水の安全の視点から「蛇口を上にしたままにしてはなぜだめなのか？」について科学的に子どもたちと共に考える授業を行ったこともある。今年は、学校環境検査の視点から、眼科医が「目の健康」の学習を行ったときに照度の点で連携することができた。

○フロア　三浦氏（真栄小学校　教諭）

今お話にあった眼科医と連携した授業を行った。子どもたちが普段から気にするようになったことが大きな成果である。１年後のアンケートで

も子どもたちは覚えていた。

●コーディネーター　大宮氏

連携が大切であり、「本物の力」は子どもたちの～したいを引き出すことがわかった。PTA の話も聞いてみたい。

○フロア　高原氏（PTA）

子どもたちは、オンラインのゲームをしていると、寝ることが遅くなったり、歯磨きが疎かになったりすることがある。また、友人間のトラブルも見られる。なかなか親の言うことは聞かない。専門家の話は子どもたちのために重要なのではないか。

●コーディネーター　大宮氏

最後に、各パネラーからまとめのお話をいただきたい。

○パネラー　千葉氏

連携の大切さは普段忘れがちである。親の言葉は耳に入りにくい部分があるが専門家の言葉の重要性を改めて感じた。

○パネラー　伊勢氏

子どもが自分からやりたいと思える指導をやっていきたい。保健室での個別の指導が多くなるが、一人ひとりの子どもたちの背景を理解し、一斉指導ではできない個別指導を進めていきたい。

○パネラー　佐藤氏

幼稚園段階では虫歯が少ない。保護者が熱心に歯磨きをしている。学年が上がるにつれて虫歯が増えていくのでそれぞれの発達段階に合わせた指導を考えていきたい。

●コーディネーター　大宮氏

子どもが自分を大切にしないと健康を考えることができない。「あなたはかけがえのない大事な子なんだよ」ということを一人一人に合わせて毎日校門で子どもたちに声をかけている。自分を大切にすることで、自分の健康をつくりだす子どもたちを育てていきたいと考えている。

# 令和６年度　全国学校保健・安全研究大会
# 「生涯を通じて、心豊かにたくましく生きる力を育む健康教育の推進」

札幌市立稲陵中学校　校長　佐々木　豊文

令和６年11月７日（木）・８日（金）、令和６年度全国学校保健・安全研究大会が、宮崎県宮崎市シーガイア・コンベンションセンターを会場に開催された。

１日目の11月７日（木）は開会式と記念講演があった。開会式では、文部科学大臣、日本学校保健会会長、宮崎県実行委員会会長からの挨拶、宮崎県知事からの祝辞、宮崎市長からの歓迎の言葉があった。

その後「令和６年度学校保健及び学校安全表彰」の表彰式があり、札幌市学校保健会関係者では長年本会の理事を務められた札幌市立手稲東小学校学校医の小池明美先生（宮の沢小池こどもクリニック）が受彰された。

**【記念講演】「子供の身体活動・運動の現代的課題と解決策」**
**～今、学校・地域・社会がやるべきことは何か？～**
東京大学大学院　講師　鎌田　真光　氏

世界の全死因死亡の９%は「身体活動の不足」（2012年データ）であるが、これは予防が可能である。例えば、わずかな運動量でも効果があり、まず１分・１秒でも動いてみる、立ってみるなど、少しでも継続すれば効果が出る。（参考　健康づくりのための身体活動・運動ガイド2023）

「日本と世界の子どもの身体活動に関するレポートカード（2022年）」によると、日本の子どもは他国に比べると活動的で良い結果である。その理由のひとつとして、登下校時に徒歩や自転車を利用している子どもが多いことが挙げられる。また、居住している地域、環境の違いに大きな差があり、都市部の方が大人も子どもも歩数が多い傾向にある。

子どもの身体活動を意図的かつ主体的となる活動が必要である。清掃活動の一部に数分間でも健康づくりに推奨される活動を取り入れてみるなど、学校で工夫することも可能ではないか。ある自治体では、スクールバスを運行している学校で、遠隔下車し、そこから歩いて登校させている例もある。このような実例や詳細なデータに基づいた講話をいただいた。

２日目の11月８日（金）には「10」の課題別研究討議会が行われた。ここでは、私が参加した第８課題（学校事故防止対策）について報告する。

**【講義】「協働を基盤とする学校事故防止の進め方」**
**～学校事故対応に関する指針【改訂版】を参考に～**
大阪大学　教授　藤田　大輔　氏

平成13年６月８日に起きた、大阪教育大学附属池田小学校の事件について、同校で校長でもあった藤田氏から事件が起きた要因、事件後の対応、反省と教訓について講話があった。

安全点検はどの学校でも取り組んでいるが、実効性を高めるために、管理職や一部の教職員だけでなく、多くの教職員の目線、子どもの目線、保護者の目線で検証することが必要である。各学校の「危機管理マニュアル」について、学校だけでなく教育委員会と一緒に作成すること、現実的な内容かどうか常に見直しをすること、作成しただけで留めないこと、形骸化しないように努めること、そして管理職不在であっても、その場にいる教職員が躊躇なく対応できるように準備をしておくことが重要である。そのために、校内研修等で確認、ブラッシュアップをしてほしい、という内容であった。

**【発表１】「日本スポーツ振興センターの災害共済給付データを活用した安全対策について」**
独立行政法人日本スポーツ振興センター　災害共済給付事業部事業課　課長　谷　雅紀　氏

同センターの災害共済給付データを活用した事故分析手法を活用し、日頃の未然防止の取組、事故の初期対応、再発防止策の策定と実施について、各学校において、校内研修等で組織的に安全教育、安全管理に取り組み、その実効性を高めてほしい。

センターでは学校で教材として使用できる資料等を提供しているが、今後はより容易に実践できるコンテンツの提供、活用方法の紹介等により、学校事故防止策の普及や安全教育の充実支援を行っていきたい、という内容であった。

**【発表２】「二度と学校事故を起こさない」**
**～大川市の学校安全の取組～**
大川市教育委員会学校教育課　主幹指導主事　藤岡　忠司　氏

平成29年１月13日に、同市内小学校の体育の授業で起きた児童の死亡事故を受けて、毎年この日を「大川市学校安全の日」と定め、市内全小中学校で学校安全の取組をしている。各学校の安全管理・安全教育に関する取組を一覧表にまとめ、各学校で共有し、安全点検方法の見直し、改善、地域と連携した研修会等を実施している。また、大川市学校安全リーフレットの作成と発信により、教職員の学校安全に対する危機管理意識を高めることで、児童生徒が主体的に安全について考えることにつなげている。

**【発表３】「学校における事故、災害の未然防止や発生時の対応について」**
枚方市教育委員会学校教育部支援教育課　主幹　大野　晴彦　氏

令和５年６月、台風による大雨で児童生徒の在校中に洪水警報が発令、その後の下校対応等に関して学校現場に大きな混乱が生じた。このことを踏まえ、同年度中に学校における事故及び非常災害時に適切な対応ができるように、枚方市学校事故等調査委員会を設置し、危機管理体制の再整備を行った。その中で台風等非常事態時の対応基準を改訂し、教育委員会・学校・保護者が連携し、未然防止と適切な初期対応に取り組み、全市をあげて危機意識を高めている。

未然防止の危機管理、事件・事故発生時後の適切な対応は、教職員の危機意識の向上と関係機関との連携が欠かせないが、そのことだけにとどまらず、保護者や地域と連携した学校安全体制が、児童生徒の安全意識・危機意識の向上につながる、ということを改めて学ぶことができた。

# 第 71 回北海道学校保健・安全研究大会

# 上川（旭川）大会に参加して

札幌市立米里小学校　養護教諭　松田　もとき

大雪山や十勝岳連邦の雄大な山々を望み、石狩川などの多くの河川が流れる自然あふれる旭川市の「大雪クリスタルホール」を会場として、雪景色に包まれる中、令和 6 年 11 月 24 日（日）、第 71 回北海道学校保健・安全研究大会上川（旭川）大会が開催された。

**〈大会協議主題〉**
**生涯を通じて、心豊かにたくましく**
**北の大地を生きる子どもの育成を目指して**
**～自然あふれる北の拠点旭川から**
**ふるさとを愛し、夢と志をもって未来へ**
**はばたく子どもの育成を目指して～**

**【開会式・学校保健功労賞者表彰式】**

開会式に引き続き、学校保健功労者表彰が行われ、札幌市からは、学校医13名、学校歯科医9名、学校薬剤師 8 名、教職員 3 名の方々が表彰された。本会からは、大宮健一事務局次長が受賞された。

**〈基調講演〉**
**生きにくさを抱える**
**子どもたちと家族を支える**
**～自傷、薬物、いじめなどを考える～**

講師　医療法人社団倭会
こころとそだちのクリニック　むすびめ
院長　田中　康雄　氏

**【基調講演】**

長期発達障害についての研究、臨床経験をもち、患者さんとその家族に寄り添い、多くの人たちとのむすびつきを大切に親身な支援を行っている講師の田中先生は、増え続ける現代の子どもたちの課題である不登校、発達障害、いじめ、自傷、虐待について、それぞれ講演された。

「不登校は、子どもからの意思表示で、主体的な行動のひとつであるため、自分で自分を救う、ある意味成長の一つである。」というお話が心に残っている。学校でできる不登校の対応としては、その子に合わせ、再登校を目標にせず、安心できる居場所をつくること、関わり続ける他者でいることである。教師が週に 1 回、または月に 1 回でも会いに行くというのは、その子や家族にとって意味のあることだとお話していただき、改めて大切さを確認できた。

最後に、「子どもたちが必要としているのは、丁寧な子育て（療育）と教育であり、かかわるものには、忍耐が求められる。」と述べられた。困りや不安を抱える児童やその家族と関わる機会の多い養護教諭として、心に留め、教職員一丸となって向き合っていきたいと思った。

**【部会別研究協議】**

午後からは、3 つの会場に分かれて部会別研究協議が行われた。

**第 1 部会**
**「学校経営と組織活動」**
心豊かにたくましく生きる力を育むための特色ある学校経営と組織活動の進め方

**第 2 部会**
**「保健管理・保健教育、安全管理・安全教育」**
生涯にわたって健康で安全な生活を送るために必要な資質や能力を育むための、学校、家庭、地域の関係機関が連携した保健管理・保健教育、安全管理・安全教育の進め方

**第 3 部会**
**「現代的健康課題」**
多様化する現代的健康課題に適切に対応するための保健活動の進め方

教職員、保護者、関係機関が連携し、どの取組の中心にも必ず「子ども」がいることが大切である。今回参加して、生涯にわたり健康であり続け、充実した生活を送ることができるよう、より一層保健活動に力を入れたいと強く思った。

# 子どもたちの健康の課題について
# 中学校での取組

札幌市立陵陽中学校　教頭　一関　浩

札幌市立教頭会は、毎年１回全日研修会を開催し、統一研修テーマをもとに、各専門部の分担による研究を行っている。専門部は教育課程部、特別支援教育部、生徒指導部、進路指導部、教育環境整備部、法規法令部の６つがあり、今日的な教育課題についての調査研究を推進し、レポート交流に取り組んでいる。レポート交流の内容について、学校保健会に関わるものを紹介する。

## １　健やかな体の育成への取組

「運動・スポーツに向き合っている生徒が少ない反面、保健体育を学習して、もっと運動しようと思う生徒は多い傾向がある」という学校の課題があり、下記の取組を行っている。

〇保健体育の授業の充実

・授業を二名の教員が担当し、少人数指導、個に応じた指導を行っている。
・Chromebook を活用し、映像等の即時のフィードバック、協働的、対話的学習を行い「する」楽しみと「見る」楽しみの両立を目指している。
・体育的行事の工夫を行った。リレー競技とゲーム感覚の創作競技を融合し、誰もが参加できるイベントを開催している。
・「ダンスウィーク」を期間限定で設定し、朝、登校後の 10 分間を用いて、全校ダンスを行っている。生徒会の保体委員会がダンスを創作し、各教室、教室前の廊下を使用し、踊ったり、昼の放送で日替わりで教員の DJ が流れたりして、ダンスウィークを盛り上げている。
「運動は楽しい」「運動したい」と思う気持ちを大切にし、そこから健康への関心を高め、体力づくり、保健等に関する正しい知識を生徒一人一人に身に付けさせるねらいがある。
・その結果、運動があまり得意ではない子どもたちがスポーツに取り組む割合が増加した。

## ２　基本的な生活習慣確立への取組

「毎日、朝食を食べている中学校３年生の割合が 73.6％（全国平均 2％低）」、「毎日、同じくらいに寝ている割合は 72％（全国平均 8.5％低）」、「同じくらいの時間に起きる割合が 90％（全国平均 2.5％低）」という全国学力・学習状況調査」の結果を受けて、下記の取組を行っている。

〇生活習慣を確立するため

・学校全体で授業の３分前着席、１分前沈黙を行っている。
・Chromebook を使い、スプレッドシートに睡眠時間や学習時間、運動時間、健康状態を入力し、週末に生活の振り返り活動を行っている。
・「まほうのかいわ」を合言葉に、こども観、教育観を学校、家庭、地域で共有しながら、連携、協働を進めた（コミュニティースクールを推進するために、目指すこども像を共有化）。
・その結果、学校評価アンケートの「学校は子どもの基本的な生活習慣が身に付くように支援を行っている」という項目では前年度と比較して、生徒、保護者、教師それぞれが肯定的な回答の数値が上昇した。

## ３　不登校生徒への組織的対応

不登校の原因は、「人とのコミュニケーションが苦手」「学習不振」「家庭環境によるもの」「ゲーム依存症で昼夜逆転」が多い中、下記の取組を行っている。

〇組織的な対応

・未然防止を基本に「楽しい学校づくり」「安全・安心した学校づくり」「積極的に予兆のキャッチ」「学習支援の居場所づくり」「教育相談の充実」「相談支援パートナーの有効的な活用」「関係機関との密接な連携」を小中一貫した教育で作成、共通した取組を行っている。
・校内において週１度の支援会議を行い、（管理職、SC、生徒支援部長、各学年代表、養護教諭、支援パートナーなど）生徒の情報を交流し、個々のケースについての対応を検討している。
・児童会館、青少年女性活動協会と連携、協力をしながら、学校以外の居場所を確保している。
・１人１台端末「心と体の健康観察」アプリを導入（シャボテンログ）し、自分の心と身体の健康状態を毎日入力し、些細な変化を可視化して把握することで、いじめの未然防止、早期発見に役立て、不登校やいじめを防いでいる。アプリは担任以外にも、学年教諭、養護教諭、他学年や管理職も見ることができ、担任任せにならないように、学年の枠を超えて学校全体で支援を行っている。
・その結果、子どもは毎日自分の変化をグラフで振り返ることができ、自分の特徴を振り返り、自己管理能力が徐々に養われ、先生とのコミュニケーションをとる機会が増えた。

## ■おわりに

現在、子どもを取り巻く状況は複雑化し、生徒たちの運動離れや、体力の低下が北海道は特に顕著にあらわれている。しかし、アンケートや調査から生徒たちが体を動かしたいと思っている実態が明らかになり、様々な角度から健康に過ごすための取組が行われている。また、基本的生活習慣の意識付けや不登校の問題についても、現場を直接見ることができる教頭という立場で、教頭会を通していろいろな取組を知り、実践していくことが重要と考える。その役割を認識し、小学校や様々な機関と連携したい。